

LDKが変えた日本の住宅

家の中心は水まわり

女性の地位と台所は、戦後歩みを一つにしてきた、という藤森照信さん。

ガスと水道が完備することで、暗くじめじめして、低い所に置かれていた台所が床上に上がってきました。

床の間が男性の象徴だとしたら、明るくきれいなダイニングキッチン、輝く一体成型のステンレス流し台は、まさに近代女性の象徴だったのです。

そして今、次なるトレンドはくつろぎの風呂に移ってきたようです。



藤森 照信

ふじもりてるのぶ

東京大学生産技術研究所教授
建築史家 建築家 工学博士

1946年長野県生まれ。1971年、東北大学工学部建築学科卒業。東京大学大学院及び、生産技術研究所で村松貞次郎に師事し、近代日本建築史を研究。

主な著書に『日本の近代建築』（岩波書店 1993）『人類と建築の歴史』（筑摩書房 2005）ほか。熊本県立農業大学校学生寮（熊本県菊池郡 2000年）で日本建築学会賞作品賞受賞。

近代住宅の変遷

UR都市機構と
集合住宅の変遷

（水まわり）
（事業・計画）

日本の暮らし・建築と
関連事業

（水まわり）
（事業・計画・法律）

●解体 ●現存
（2005年6月現在）

世の中の動き

（震災・天災）
（金融・経済）

●三菱一丁倫敦6・7号館

日露戦争始まる

「田園都市」刊行（内務省）
貸家構造制限（東京府）



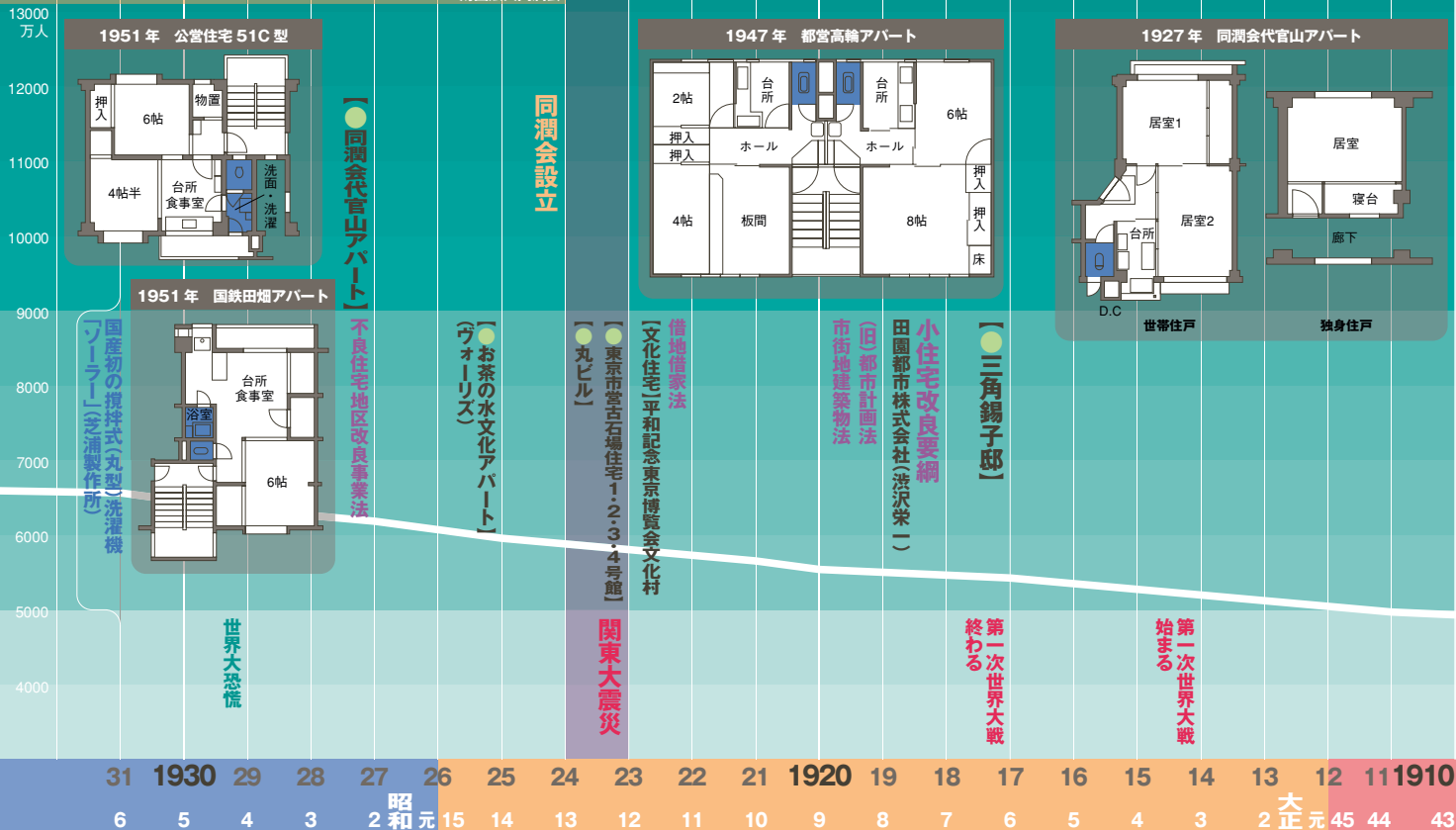
日本の人口

09	08	07	06	05	1904	明治
42	41	40	39	38	37	

台所が床に上がるまで
日本でいうと明治ごろまでの大住宅、イギリスだとビクトリアン様式まで、いわば邸宅といわれる住居では、水まわりを内に入れていない。
水まわりで一番大きな所は台所です。台所は、臭いと音がお客さんや主人にいかないようにするのがすごく重要だった。だから、主人のいる所とは離す、という大原

則がある。できるだけ、遠い所や別棟でやっていった。
お寺に行くとき庫裡つてあるでしょ。行事はお堂でやりますが生活部分は庫裡。そこはお客さんが来る所とは少し離れているんですよ。お客さんが来る所には、畳が敷いてあって天井が張ってある。でも庫裡は全然違って、土間で梁が露し。それは作業場という意味がある。
これは近代化以前の町家もそう
で、通り庭に台所があつて、要す

るに「工場」ということ。もっと言うと、あそこだけは縄文以来の名残を止めている。縄文時代の名残は、ずーっと水まわりに引き継がれていたっていうことですね。
東京でも、関東大震災復興前の時代の住宅を調べると、やっぱり水まわりは土間。大隈重信はヨーロッパ流の立派なキッチンを入れるんだけれども、やはり土間で、天井はがらんとしてる。
では、台所が生活の中に入ってくるようになって、今のようになつて



態に変わってきたのはいつなのか。震災復興期には、下町の商家などでは台所が床の上上がつてきて、板敷きですが土間ではなくなつていく。これは、水道の敷設と竈ではなくガスを使い出したのが大きな理由。だつて、竈や水瓶だつたら、やはり板敷きの上へ上げにくいでしょ。

火と水がちゃんとして、どこから汲んできたりしなくても水道管やガス管を捻れば水や火が供給されるようになったことが、縄文時代との決別を促したんです。

ガスと、蛇口を捻つて出るようになる鉄管の加圧水道が完備して初めて台所というのは普通の空間になった。もつと言いますと、女の人の空間が床の上上がつてきて、初めて普通の生活レベルになつたということですよ。

だけれど、相変わらず陽の当たらない、暗い汚い所にあつたことは間違いない。これが本格的に変わるの、やはり戦後です。

LDKの成立

先駆的にはね、大正ぐらいから「こんなことじゃあ、まずい」といつて運動はあつたんですが、本格的に変わるの、戦後で、まあ日本住宅公団（現・独立行政法人都市再生機構）ですね。

公団は台所の窮状をなんとかしようとして、まず台所と食堂を一緒にするんですね。それで台所が明るい所に出てくるんです。

明るい所に出てくるんだけれど、それにふさわしいものになくちやいけないという大問題が生じてくる。その結果、ステンレスの流し台という新製品がサンウエーブで開発されます。ステンレス流し台で決定的に変わるんです。

公団つていうのは偉大でね、戦前の暮らしてつていうのは座敷が重要で、床柱を背に男の人が座る。それは一番良い席だつた。南側の庭に面した部屋で、正月とか、お客さんが来たときだけとか、日頃は使つていない場合も多い。座敷は男の象徴だつた。

それが戦後、台所と食堂、それとリビングを一緒にする。つまりLDKの成立。今の住宅は、ほとんどこの形式です。それによって男女の力関係が一気に逆転しちゃつた。これは戦後の家族像そのままで。今、自宅の建築費の中でかつての床の間の代わりみたいなもんですよ。

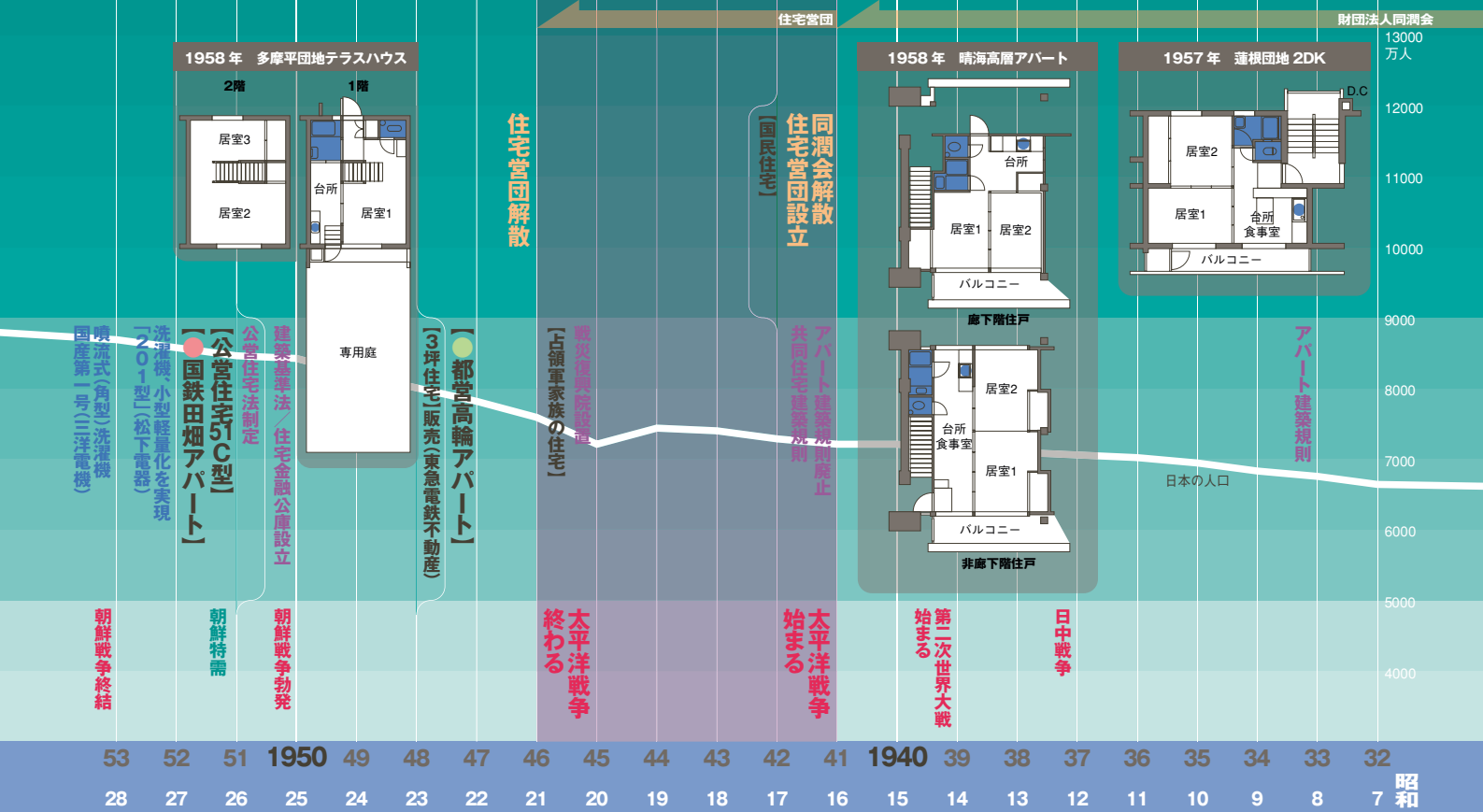
同潤会が先鞭を付けたコンクリートの集合住宅という器に、公団が新しい生活のための間取りと設備を組み直して入れた。その立役者はステンレス流し台だつた。

それ以前の人研ぎの流し台というのは、何とも汚いものだつた。魚の鱗とかがこびりつくかどうかどうしようもない。サンウエーブが開発して、ステンレス流し台は日本の近代住宅に素晴らしい発展をうながした。

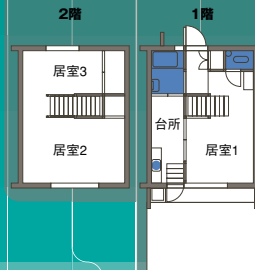
不思議ですよ、道具一つで変わるんですから。それまでのセメントの人研ぎの流し台でやっていたら、LDKなんていうものにはならなかつたと思えますよ。そういう意味では、日本はLDKの先駆者じゃないかな。

でも結局、仕方なしにやつたことなんでですよ。狭くて、「どうやって暮らすんだ」と頭を悩ますぐらいの空間でしたから。それぐらい狭い場所は、食事をする場所と寝る場所を分けるのがまず第一だ、と京大の西山卯三先生が「食寝分離論」で言つたんです。

それまではお茶の間といつて、屋は卓袱台を出して、夜になると脚を畳んでしまい、布団を敷いて寝るといふ、食寝同室だつた。西山先生は、狭くてもいいから食事室を安定したものとしなさい、という主張を戦前にしていたんです。それを公団ができたときに、東大の吉武泰水さんや鈴木成文さんなどが参考にしていった。だから、もともとは公団が考えたことではない。



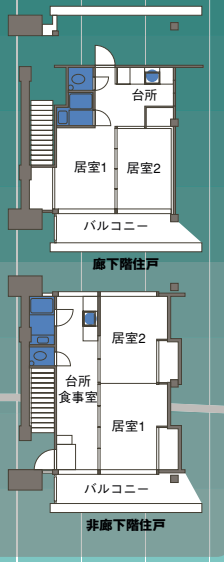
1958年 多摩平岡地テラスハウス



2階 居室3 居室2
1階 台所 居室1
専用庭

【公営住宅51C型】
国鉄田畑アパート
洗濯機、小型軽量化を実現
200型(松下電器)
噴流式(角型)洗濯機
国産第一号(三洋電機)
朝鮮特需
朝鮮戦争勃発

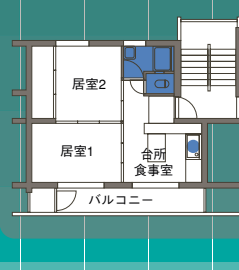
1958年 晴海高層アパート



居室2 居室1
台所 台所
バルコニー
廊下階住戸
非廊下階住戸

同潤会解散
住宅営団設立
アパート建築規制開始
共同住宅建築規制
第二次世界大戦
日中戦争
太平洋戦争
太平洋戦争
太平洋戦争

1957年 蓮根団地2DK



居室2 居室1
台所 台所
バルコニー

アパート建築規制
日本の人口

西山卯三 (にしやまうさむ) 1911~1994年
京都帝国大学建築学科を卒業後、石本喜久治の建築設計事務所に入所。1940年に同潤会研究部を経て、京大教授、食糧分譲論を展開し、のちの住宅計画に影響を与えた。

吉武泰水 (よしたけやすみ) 1916~2005年
日本の建築計画学の創始者。集合住宅のプロトタイプである「51C型」や、建築における規模計画に用いられる数値・統計手法「あぶれ率法(法)」などで知られる。病院・学校・集合住宅などの研究に業績を残した。

鈴木成文 (すずきしげぶみ) 1927年~
吉武泰水のもとで、建築計画学を研究する。東京大学工学部教授を経て、神戸芸術工科大学学長。公営住宅の標準型「51C型」の設計に吉武研究室の一員として参加。

よくLDKの発祥は1951年の公営住宅標準設計「51C型」といいますけどね、実はたいして広くないの。同潤会とい勝負。公団と同潤会は組織としてはつながっていませんが、技術者とか人は結構流れて来ているんです。だから、同潤会のことはよく知っています。それで、同潤会と同じものじゃないかと思えた。

公団がこのままじゃマズいといつて、3つ改良点を挙げるんです。一つは一体成型のステンレス流し台。それまでに鑢づけのステンレス流し台をやった経験があった浜口ミホさん(16ページ参照)に指

導させて、サンウエーブにやらせた。サンウエーブの柴崎勝男さんは三菱電機の工場の片隅を借りてやっていらした。ステンレス板を絞っても絞っても割れるんだよ。それで巣鴨のとげ抜き地蔵のお札を貼って絞ったっていうんだよ。まあ、そういう面白い人なんだ。熱心で。

公団が「台所を明るくしよう」と思った理由は明確で、狭いけれどせめて台所を明るく新しいイメージにしたい、と。

もつと言うと、本城和彦さんがおっしゃっていたのは、新しい所はないんだって言うんだよ、公団をつくったけれど。それで、せめて、せめて流し台だけは良くしよう。と。それぐらいはできるだろう。これは技術者側の思い。

本城和彦 (ほんじょうまさひこ) 1899~2002年
ダイニングキッチンという造語の命名者。1938年(昭和13)東京帝国大学工学部建築学科を卒業後、通信省官備課に入省。戦後間もなく戦災復興院に移り、経済復興計画の作業や国土総合開発法の立法に携わり、日本住宅公団在職中には、当時の公営住宅規模(2K・12坪)を超えた公団の規模(2DK)を決定し、住宅内の食糧分譲型を進めて居住水準を高めるなど、現在の間取りの原型となるスタイルをつくり上げた。

次に風呂釜。これを東京ガスに開発させた。ところがRCでがつちりつくつてあるので、今までみたいに隙間風なんかがないから中毒になる。それでバランス釜を開

発した。

最後は鍵。初めて鍵つきにしたのが公団。これを、掘金物店にやらせた。

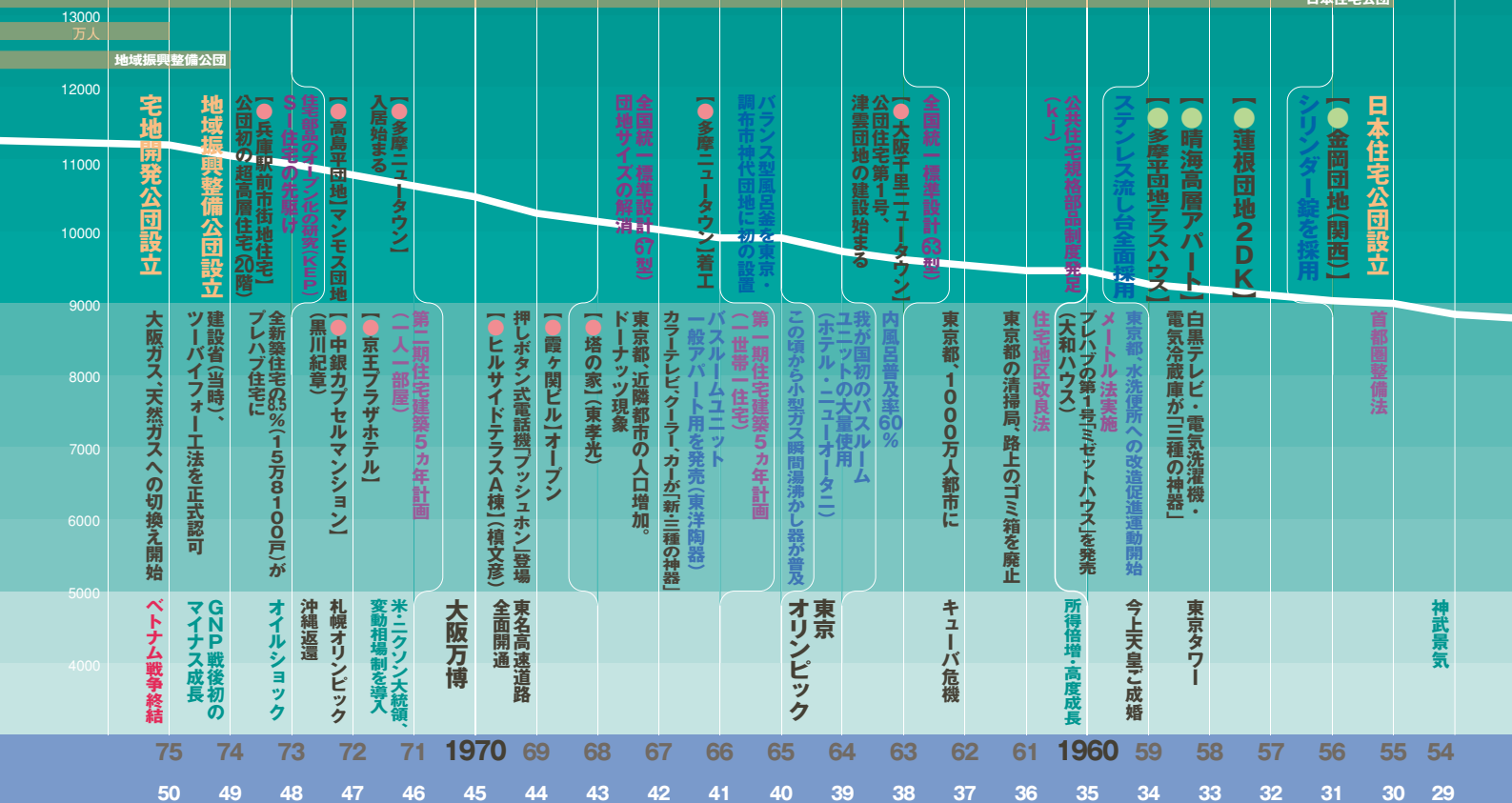
だから流しと風呂と鍵。

もう一つ言うと、公団の初代総裁というのは加納久朗で、東京銀行の前身だった横浜正金銀行ロンドン支店長を長く務めた。だから外国の暮らしに比べ、日本の住宅があまりに悲惨だと。だから加納は、せめて一つくらい光るところをつくりたい。なんとかしら、と号令をかけた。とても熱意のある人だった。そんなこともあつて、鍵はすぐに実現した。

加納久朗 (かのうひさあきら) 1886~1963年
上総一宮藩最後の藩主加納久宜(かのうひさよし)の子で横浜正金銀行ロンドン支店長、取締役などを歴任。日本住宅公団の初代総裁(在任1955~1959)に、1962年(昭和37)千葉県知事に当選するも、在任わずか110日で急逝した。東京湾の大規模埋め立てによる新首都建設を提唱し、この計画の解説書として「新しい首都建設」(1959時事通信社)を著している。

今見ると、シリンドー錠なんか、ちやちやなんですよ。ただ、それまでの日本にはネジ式のもつとちやちな錠前しかなかった。

だから公団は、女性進出とプライバシーの確立に貢献したんですよ。プライバシーっていつても、他の住戸からのプライバシーを鍵で守る程度。中はたいした扉もついていないし、まだ個室化してい



ませんから。個室化していくのは、このあとの段階です。

世界を席卷したLDK

こういう人たちの熱意で公団住宅が完成して、圧倒的にステンレス流し台が評価を受けた。あんなに売れるとは思わなかったらしい。あれで日本の住宅は、一気にLDK、女の城っていう路線になる。

こういうことは世界の住宅史でも珍しいんですよ。最初は貧しい人たちをどうするかというところから始まって、西山さんの食寝分離、そして戦後になって狭いけれどちゃんとした住宅をつくらうよ、というところにつながっていく。

それが今では高級マンションでも、だいたいがLDKでしょう。

下から始まっていつて上を変えるところというのは、大変に珍しい現象です。他の国の場合は、お金持ちはあるなりに狭い所に住んでいませんから、日本だけでしょう。

ただ、欧米でも建築家のつくる家はLDKが多いですよ。建築家つてもともと、部屋を区切るのが嫌いだからです。

そういう意味で日本は、LDKというスタイルを富める者も貧しい者も採用するという、珍しいケースなんです。LDKの中心は台所なんです。

立体最小限住宅とコア・システム

当時一世を風靡した立体最小限住宅は、日本では池辺陽さんが中心になってやった。あれはル・コルビュジエのところに行った坂倉準三さんが、モダニズムの人たちがやっていた生活最小限住宅に強く影響されて、持って帰ってきたものが基になっています。

池辺陽 (いけへきよし 1920-1979年)
建築家。1950年(昭和25)「立体最小限住宅」と呼ばれる住宅を発表し、都市住宅のプロジェクトを機能主義の視点から提案した。また、建築を工業化という方向からとらえた坂倉準三 (さかからじゆんぞう 1904-1969年)
建築家。1929年フランスに渡り、パリ工業大学で学び、引き続きル・コルビュジエに師事する。1937年のパリ万国博覧会・日本館の設計を手がけ、建築競技審査で一等を受賞。モダニズム建築を実践したほか、1959年ル・コルビュジエが基本設計した東京国立西洋美術館を同じく弟子であった前川國男、吉阪隆正とともに担当するなど、ヨーロッパ建築界との架け橋となった。

池辺さんは東大に来る前は坂倉事務所にいた。池辺さんが生活最小限住宅で小さなアイランドキッチンをつくったときには、もちろん一体成型のステンレス流し台じやありません。一体成型というのは、金型をつくるのにものすごくお金がかかるから、何千何万という数をこなすものでないと使えないんです。

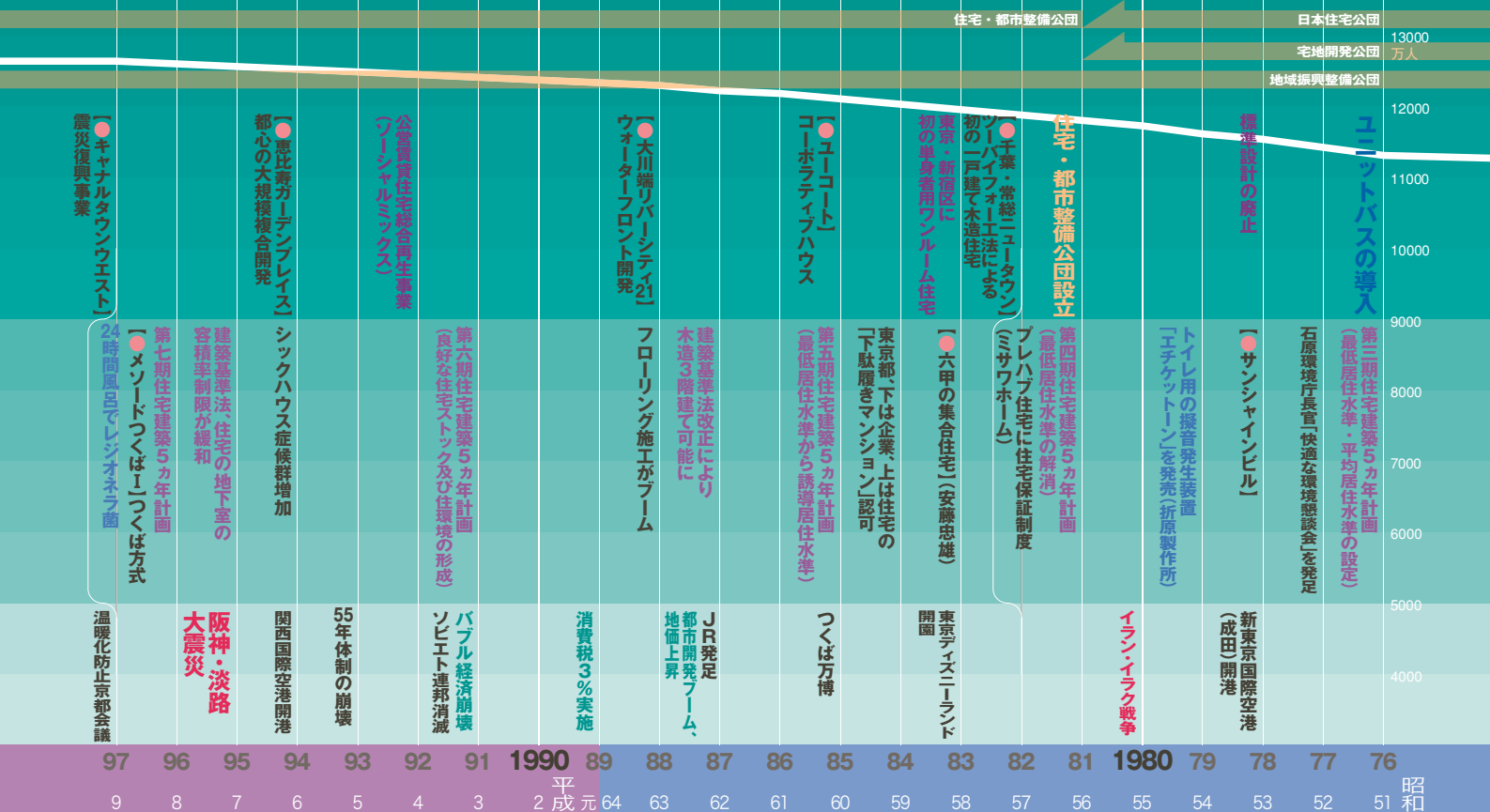
最小限住宅で台所を独立してつくるのは大変なんです。それで真ん中に置く。

もつというとな、配管を真ん中に置かっていう考え。ガス、水道、電気の配管をすべて真ん中に持つてくる。これはコアっていつて、オフイスビルづくり方なんだ。一番でかい配管がエレベーター。人間の乗り物というよりも、人間を流しているんだね。だって、みんなあれに入るとシーンとして黙っちゃうでしょう。ぎっちゃり立って流れてる状態なんです。

住宅政策

普通は行政が政策を出せば、儲かって利益が出る業界が現れ、業界利益を擁護し官庁と結託する族議員というのが誕生する。でも住宅の族議員なんて、聞いたこともない。建設省(当時)がどんなに素晴らしい住宅政策を出しても、それが材料や物品をコントロールする通産省(当時)の産業政策として機能するから、住宅政策立案者を擁護してくれるような業界も議員も現れなかった。

戦後日本は、官僚と業界と族議員が緊密に結びついて動く、いわゆる「鉄の三角形」が引つ張ってきた。全部の産業がそうやって回



わりながら、業績を伸ばしていったんだから、官僚・議員と業界が結びつかなかったというの、住宅産業にとつて最大のネックです。だから、政策としてちゃんと住宅をとらえようとする政治家も官僚も出てこなかった。このことは早い段階からわかってきた。唯一やろうとしたのが同潤会だったんですが、内務省内のこの方面の担当だった池田宏という人は貴族院に「お前のやっていることは社会主義だ」といつて潰されてしまっています。

土地と住宅を公共財としてみないのも、建て替えサイクルがヨーロッパの国と比べて極端に短いというのも、こういうところからきているんです。先進国でこんな考え方なのは、日本ぐらいですね。スクラップ&ビルドでどんどん建て替えてもらえると、建設業は喜ぶ。ただ、そこには役人が天下るとか、政治家がバックアップしてもらえない団体があるわけではない。だから、やっぱりバラバラに存在して、回っていない。

政策に期待できないとすると、民間はどうか。売れ残った不良資産をどうにかするために、マーケットベースで売れる方策を努力して開発する可能性はあるのか。僕はないと思う。民間のデベロッパーは公団の後追い。何も民間らしいものは生み出していません。

まず、これはアメリカで言われ始めるんだけど、ある時期から建築レベルが減茶苦茶落ちてくるんですよ。それはデベロッパーが仕事をコントロールするようになったから。デベロッパーが興味を持つのは、投資とどれだけ収益が上がったかということだけで、住宅の質とかつくりには興味がないんだ。

工業とか産業とかでは、なかなかバブル崩壊までいかなかった。だって、いらぬものに工場をいっぱいつくって倒産するヤツはいっぱい。どんな製品だって在庫がいっぱいになったら銀行がきて、「もうつくるな」って言うでしょう。

住宅って、値段が高い割には決定権は個人にあるから、事態がわかるまでにタイムラグがある。工場に製品が並んでいれればすぐにかつて、誰かがやめろって言うけれど、住宅はやめろって言うまでに時間がかかる。それに住宅は政府が保護しますから、借金がしやすい。あとのことを考えずに、やってみたらダメだったという先送り。それが今回のアメリカのサブプライムローン問題につながっているでしょう。

こういう危うい面がある住宅だから、日本もちゃんとした政策、づくりに取り組んでいく必要があると思いますよ。

男も女も水まわり

僕が家を設計するとき、水まわりは普通にしますよ。特別なことはしない。

公団がLDKを考えたときに、水まわりはもう成熟しちゃったと思う。ほかにやりようがないもの。決定的に変えて欲しいという要求

僕が聞いた話ではね、本当かどうかはわからないけれど、世界のバブル崩壊というのは必ず不動産・住宅と結びついているという。最初のバブル崩壊の引き金はパリの大改造計画だったそうです。あれで住宅をバアーツとつくってひどいことになったらしい。

パリ大改造計画

19世紀、セーヌ県知事のジュール・オスマン(1809~1891年)が取り組んだフランス最大の都市整備事業、ナポレオン3世の構想に沿って行なわれた。

コラム：狭小住宅考

都市への人口流入によるスラム形成や、震災や戦災による住宅の焼失は、「雨露しのげる場所さえあれば」というほどの住宅難を引き起こす。日本の住宅の狭小さは、こうした住宅難に素早く対応することを急ぐあまり、質や広さを後まわしにしたことから始まっている。

しかし、こうした貧しさ故の狭さではなく、思想やモダニズムの見地から狭さに挑戦した人たちがいた。水まわり空間が一体化していく源は、そうした建築家たちの手法にも求められるのかもしれない。

明治期の住宅改良運動

アメリカ・シアトルで雑貨屋「橋口商店」を営んでいた橋口信助は、1909年(明治42)に帰国後、東京の洋家具発祥の地である芝で「あめりか屋」を開業する。ツーバイフォー式の輸入住宅と建築材料や家具の販売を始めたのだ。

部屋の独立性の低さなどから、伝統的な住まいを改良する必要性を訴える声が上がっていた時代に、橋口が提案する「中廊下のある住まい」は中流層の支持を受け、橋口は家政学者 三角錫子らと住宅改良会を立ち上げている。

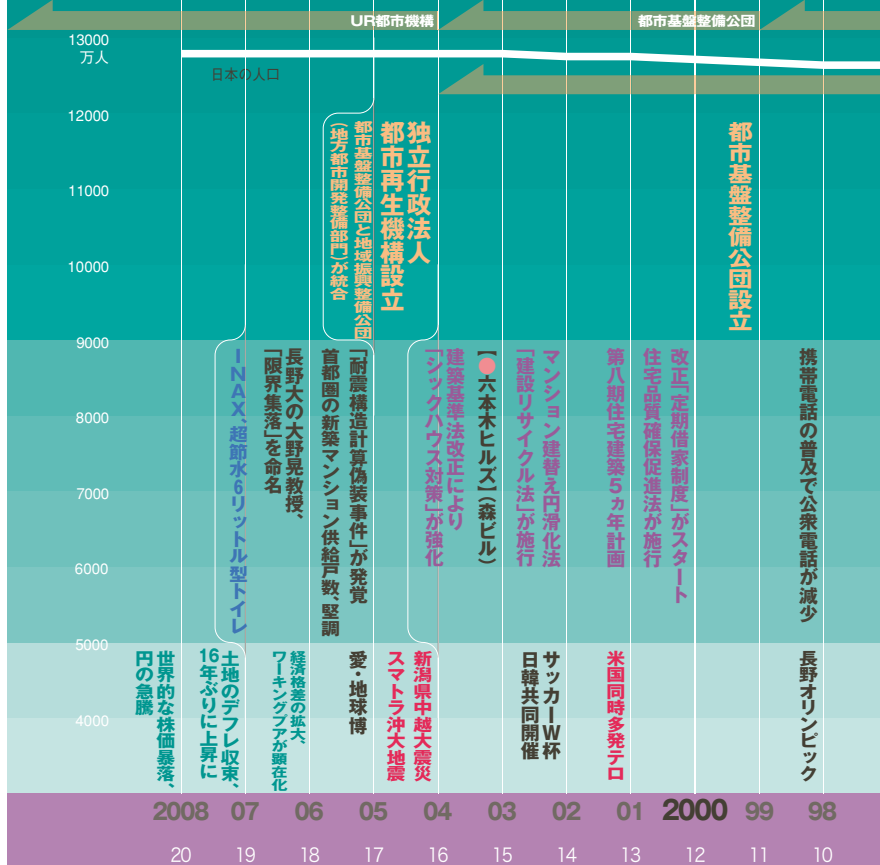
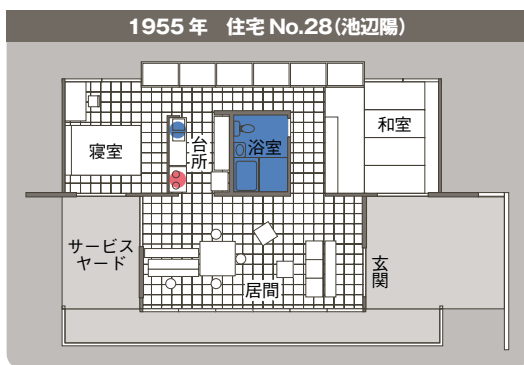
三角は、アメリカの自動車メーカー フォード社の生産技術システムを家事労働に取り入れて、科学的管理下の家事労働を提唱した人物。自邸は、その「動作経済」概念を体現するものとして、橋口が設計した。当時の中流家庭では中女がいることが珍しくなかったが、三角は主婦が一人で家事をこなすために、思い切って台所空間を小さくつづけている。

*「三角錫子邸」1917年(橋口信助)間取りは年表を参照

コア・システム

椅子式・水洗トイレ・改良台所といった近代的生活に必要な最小限の要素を確保するために、建築費のバランスをとりつつ、いかに一般住宅の価格に近づけるかを、池辺陽は平面・断面のデザインで追求した建築家だ。

当時欧米で流行り始めたコア・システム概念を、「プランニング・コア(平面)」「コンストラクション・コア(構造)」「エキップメント・コア(設備)」と名づけ、建築の構成原理として理論化。水平方向(間取り)だけでなく、最小の容積内に良質で最大の生活空間をつくらうと試みた。藤森さんが言うように、狭さ故に設備は中央にまとめられる傾向にあり、そのことが水まわり空間の集中を促したといえよう。



が出ないぐらい、もう50年ぐらい前に成熟している。

公団とか池辺さんたちのコア・システムとか、いろいろ出尽くしているでしょ。それで充分って感じがあります。台所について主張がある建築家ってというのは、宮脇檀さんが最後なんじゃないのかな。

宮脇檀 (みやわきまゆみ 1936~1998年)
建築家、エッセイスト。洋画家の宮脇晴とアツブリケ作家の宮脇綾子の子息。東京芸術大学で吉村順三に師事し、集落調査などを経験。工学に軸足を起すがちね日本の建築を、美や芸術の視点から見直すことを提唱した。打放しコンクリートの箱型構造と木の架構を組み合わせたボックスキットがあり、「松川ボックス」は1979年に第31回日本建築学会賞作品賞を受賞。著書も多く、家族のあり方を踏み込んで書いた『男と女の家』(新潮社1998)は絶筆となった。

台所の水まわりというのは、女性の力が向上するのと同じように歩んでくるわけです。悲惨な江戸時代から、今や一番単価の高い所になるように。

問題は、じゃあ男はどうするんだっていうことです。ひたすら落ちていきますから。まあ、実際家において、たいして役に立たないし。いや、昔は役に立ってたんですよ、薪を割るとか。今はほとんどそういう役割はないからねえ。

男の人は居場所もないし、お金をかけることもできない。例えばね、庭に松を植えない。松は男の象徴のような木だった。ガーデニングなんてブームになってるけれど、名もない草を植えて、幼稚園のお遊戯室みたいな状態になっ

ている。あらゆる所で、男はダメなんだ。

最近住宅機器メーカーさんと話していて面白いと思ったのは、住宅内での男の居場所として、お風呂が充実してきているらしい。勤めから帰って、まあ女の人も今は働いてる人も多いから帰ってくるんだけれど、お風呂に入るぐらいしか楽しみがない。一時、「書斎をつくらう」という動きもあったんだけど、結局物置にしかならなかったからねえ。お風呂は1.0㎡増やすだけでも相当違いますから。こうなると、少しは男の立つ瀬もあるんじゃないかと。寂しいけどね。ほかにないからなあ。お父さんだけが使う空間にお金をかけようとする、ほかの家族に却下されちゃう。風呂だって、結局男だけじゃなく家族みんなで使う場所なんだけれど、そこには触れないようにして男の城である、と。寂しいけど、面白いですよ。水まわりが結局、男と女の双方の要望を満たすものになっているんだ。

風呂を屋上につくる人とか、露天風呂にする人とかもあるな。風呂は、台所と同じぐらい広く! そうなると、どっちが南向きを取るか、熾烈な争いになるかもしれない。

